

# 木村 助男（きむら・すけお）

## 1、プロフィール

方言詩人。方言詩誌「芝生」(カガワラ)同人となり、方言詩を同誌に発表。自選の未発表の方言詩 35 篇を収録した方言詩集『土筆』(ベベコ)は没後まもない昭和 18 年8月 10 日に刊行された。

<生没>

1916(大正5)年3月 14 日 ~ 1943(昭和 18)年7月 30 日

<代表作>

方言詩集『土筆』(ベベコ)

<青森との関わり>

北津軽郡飯詰村(現五所川原市)に生まれる。横須賀海兵団から傷痍軍人として帰郷後、郷里で療養生活を送りながら方言詩を創作した。

## 2、作家解説

方言詩人。大正5年3月、北津軽郡飯詰村福泉(現五所川原市)に生まれる。昭和7年3月、飯詰高等小学校卒業。昭和 12 年1月1日付で横須賀海兵団に入隊し、上海・厦門などの南支上陸作戦に参加する。昭和 13 年7月、肺結核に冒され、厦門野戦病院に収容、14 年には横須賀海軍病院に護送される。後に木村はこの頃のことを回想して「自身に何か変わった時でなければ、余り郷土を考へないものである。私が有難い土地だと考へたのは、戦病に依っての野戦病院以後である」(方言詩集『土筆』(ベベコ)後記)と記している。16 年、海軍を除隊され、傷痍軍人となり帰郷する。

故郷で療養生活を送る中で、「月刊東奥」掲載の一戸謙三の津軽方言詩に出会い、「今迄で考へ続けていたのが此だ！」と感銘を受け、夢中で方言詩を書いた。「月刊東奥」方言詩欄に投稿し、一戸の指導を受けるようになる。17 年4月、

日幌草太・小枝九郎らによって再刊された方言詩誌「芝生」(カガワラ)の後期同人となり、「春」(5号)、「梅の花コ」(春)(6号)、「旧暦」(7号)、「初夏」(宵宮(ユミヤ))(8号)、「秋の暮」(十五夜)(9号)、「秋の暮」(10号)を発表した。

方言詩の創作に熱中した木村は、やがて詩集刊行を決意し、18年2月、在京の藤田重幸に方言詩集『土筆』(ベベコ)(未発表の自選詩35篇)の原稿を送り、刊行を依頼した。しかし7月30日、病状が悪化し、逝去。わずか11日後の8月10日、ガリ版刷りの方言詩集『土筆』(発行所 抒情性クラブ)が刊行されたが、木村がこの詩集を見ることはかなわなかった。

詩人・福田正夫は、この詩集の「序」において、「終りの長篇『養鶏』には泣かされた。そして戦陣にあつて、故郷を思ふの情深ければ深い程、野戦病院での方言思慕が木村君を駆つて、この一巻を成さしめたと思ふ」と記している。

木村助男が名付け親となった甥の捷則によって、平成4年の50回忌にあたり方言詩集『土筆』の復刻版が刊行され、飯詰高楯城のふもとに「木村助男詩碑」の建立が果たされた。

### 3、資料紹介

○方言詩集『土筆』(ベベコ)

図書

1943(昭和18)年8月10日

183mm×130mm

昭和18年8月、抒情性クラブより発行。編集は藤田重幸(蘭繁之)。標題作ほか、未発表の方言詩35篇からなり、巻頭に福田正夫「序」、巻末に藤田重幸「跋」、木村助男「後記」を収めたもの。

平成4年の50回忌にあたり、甥の木村捷則により復刻版が刊行された。